キリスト教徒は「律法の管理下」に在るのでしょうか？

「キリストが私達にお与え下さった自由と共にしっかりお立ちなさい」と福音伝道者が聴衆の「アーメン」と共に叫びます。

「律法の管理下」に置かれるという事は、キリスト教徒が最も信じたくない事柄の一つです。　確かに、「人の正しさは律法の善行ではなく、信仰によって定められる」（ローマの信徒への手紙３章２８節）という事はキリスト教徒なら誰でも知っています。

だからと言って、キリスト教徒は「十戒」に従う必要がないのでしょうか？言い換えれば、キリスト教徒が他の神を崇めたり、他人の物を妬み、嘘をつき、不倫をし、盗んだり、「偶像」にひれ伏すといった様な十戒に背いた行動をとっても、罪にはならないのでしょうか？

ガーナー・テッド・アームストロング著

皆さんは、青春時代に法を犯して牢屋に入った事がある、と無邪気に認める人の話を何度耳にした事がありますか？

演説法の実践として、または食事中に緊張をほぐす話の「きっかけ」として学生達がこうした事を話す場面を、私は数多く覚えています。

中には何エーカーもの松林に放火し、多くの納屋や自動車等を破壊して損害を与えたという酷い話もありました。

なぜか今日では「魔がさした」という言葉が面白がられています。

では、私達に法に反する行動を自慢させる、人の本質の一部である魔とはいったい何なのでしょうか？

年配者の間にはなぜ、「若気の至りで放蕩して」行った犯罪や、街中での喧嘩、公共物破損といった悪ふざけ、悪質な悪戯、そして警官からの必死の逃亡、等といった様な事をした青年時代を誇りに思う傾向があるのでしょうか？

私達に権力を嫌悪させる人の本質とをは、いったい何なのでしょうか？

人間には、まるで生まれ持った、法を破りたいという内に秘めた衝動があるのでしょうか？

無法時代

第二次世界大戦後の植民地帝国の崩壊に伴い、世界は、何百万という命を奪ったぞっとする様な粛清や、大虐殺の事実に何度も脅かされてきました。

異教の国の「野獣」という聖書の記述の様な政府指導者達は、ますます人権や正当な法、また国際法を全く無視して自らを法たらしめています。

膨れ上がる独裁制度、つまりは、世界中の国々で起こっている「強力な」独裁者による支配に対して、抗議する声はワシントンや他の地域でもほとんど聞かれません。

「人権」は独善的な政府指導者によって、ある国での人権の欠落を非難する一方、別の場所でのおぞましい大量殺人に背を向けるといった様な、都合のいい使われ方をしています。

米国では、近所の言い争いが銃撃で決着する様な危険な時代に近づいています。

十代の非行集団が街中で互いに銃や手榴弾で争い、様々な超右翼派や独裁主義の組織が、彼らがやがて来ると主張する革命の日に向けて、（あるいは彼らが常に主張する、ユダヤ主義者や共産主義的な教会協議会の一つである「秘密結社イルミナティ」の様な現実あるいは空想の陰謀に対する最後の防戦の為に）武器弾薬を貯めこんでいます。

皆さんが住む世界は暴力の世界なのです。悲しいほど権力が乱用されるために、多くの名ばかりのキリスト教徒が「大切なものを無用なものと一緒に捨て」てしまい、あらゆる権力に背を向けがちになっています。

米国南部の田舎者の保安官が、黒人の移住労働者を容赦なく拳銃で殴ったり、残忍な看守が無力な受刑者を叩きのめしたり、精神病棟の新入患者を大柄な看護師が非人道的に扱う様な喜劇番組を、私達は見た事があります。

こうした権力の乱用が暴露されていない日刊新聞を読む事は滅多にありません。

大統領官邸から議会、州都から刑務所制度、警察から教会に至るまで、政府権限や地位の非道な乱用が一般的である事を私達は知っています。

この様な政府権力の違反行為から「逃れた」と思う人達は、無意識に政府や官僚主義の全てを拒絶する傾向にあります。

こうした状況において、愛、赦し、信仰、慈悲というナザレのイエス・キリストの寛大な教えを信じる名ばかりのキリスト教徒にとっては、大切な日々の勤めを放棄し、十戒に従うという義務さえも忘れ去り、「自由本放に」生きるのは容易い事です。

その結果、大勢の人々が「神は死んだ」と信じ、また、神は「生きて」おられると信じる多くの人々さえ、神の「律法」は死んだと思ってしまうのも無理ありません。

神の律法と、あなたと律法の関係に関する真実を、今こそご自身の目で、ご自身の聖書でご覧になって下さい。

慈悲とは何でしょう？

最も頻繁に使われる言葉の一つに、「律法の下ではなく、慈悲の下に在る」というものがあります。

しかし、慈悲とは何でしょう？人が「慈悲深い」という際は、一般的に優しく、親切で善良である事を意味します。多くの親が誕生した娘に、穏やかで柔和な気立てになるようにと「グレース（慈悲）」と名付けてきました。しかし、聖書に記されたその言葉の意味、特に「律法の下ではなく、慈悲の下に在る」と言うのはどういう意味なのでしょう？

手始めに、それは罪を犯す許可を表しているのでしょうか？

「それは違います！」という答えが返ってくるでしょう。 しかし、罪を犯す許可でないとしたら、それは神の律法を守る必要がないという意味なのでしょうか？

「それは…また別の話です」という答えが返ってくるでしょう。

それでは、ウェブスター・ニュー・カレッジ英英辞典（Webster’s New Collegiate Dictionary）で慈悲（grace）の意味を見てみましょう。

慈悲とは「望み、親切、慈悲、等」の意味です。教会の用法では、「神の慈悲もしくは赦し」です。

慈悲とは、単純に親切で善良かつ優しい気立てであるだけではなく、神の望みと慈悲、つまり神聖なる慈愛または赦しの意味も含んでいるのです。

しかし、何の赦しなのでしょう？

もちろん、罪を犯した事に対しての赦しです！

しかし、ここでまた別の言葉の定義が気になりませんか？罪とは何なのでしょうか？

聖書はこう言っています。「罪とは、律法に背く事です」（ヨハネの手紙I、３章４節）

もし罪が神の律法を破る事であるならば、それはまた神の律法を「守らない」事でもあるのです！

ヘブライ語に由来する罪という言葉は厳密には、「的をはずす」あるいは「失敗」を意味します。してはいけない事を犯す罪もあれば、すべき事をしない罪もあります。罪を「犯す」という行為は、神の十戒や、イエスが山頂での説教やご自身の生涯、そして教訓を通じて示された十戒に、例え間接的にでも反する行為の事です。

善を行わない事で、無意識のうちに人は罪を犯しているのかもしれません！ 神はこう言われています。「人がなすべき善を知りながら、それを行わないのは罪である。」

罪とは神の律法を破る事だけではなく、神の律法を守らない事でもあるのです。

神の律法を破った時、人は「罪人」と言われます。

「人は皆罪を犯し、神の栄光により遠のいてしまった。」（ローマの信徒への手紙３章２３節）

人は皆、神の聖なる律法である十戒を破ってきました。罪とは、キリストによって新約聖書で強調された、原則としての律法を破る事です。（ヨハネの手紙I、３章４節）

私達は皆、基本的な本質の一部として、神の律法に対する反抗心を生まれながらに持っています。（ローマの信徒への手紙８章７節）私達は神の十戒を破るという罪を犯しているのですから神の法に対して有罪なのです！私達が罪を犯す時、律法は私達に死と言う罰を科します。（ローマの信徒への手紙６章２３節）神の視点からすれば、私達は「ひどく罪深い」とみなされ、私達は命をもって支払わなければならないのです！

しかし、ナザレのイエス・キリストが私達の罪の贖いの為に亡くなられたので、私達は死ぬ必要もなく、自らの違法や不法行為の代償を払わずに済んでいます。

慈悲とは神のお赦しなのです。私達がイエス・キリストが流された血と、私達の罪の告白を受け入れて、私達の救世主としてイエスを受け入れた時に神が与えて下さる、私達のとっては不相応な、身に余る、労せず得た赦しです。

「神の豊かな慈悲により、私達はそのお方（キリスト）を通じて、その血によって救われ、罪を赦されました！」（エフェソの信徒への手紙１章７節）

従って、慈悲とは、神の十戒を破り、罪を犯した私達を赦す、神の愛に満ちた御意思なのです！

これは聖書にはっきりと記されています。にもかかわらず、多くの人々がこの事について今だ困惑したままでいます。

慈悲の「許可」への変換

新約聖書の記述が終わる前に、神の導きによってユダは次の様に記しました。「愛する人達よ、私の情熱の全てを込めて、「私達の救済」についてあなたに書き与えます。あなた達にこれを書き示し、聖者達にかつて伝えられた、信仰の為に精進する事を勧める必要があったからです。古より裁かれる定めにある不信心な者達が秘かに忍び込み、私達の神の慈悲を怠惰（悪を行う許可）に変え、私達の唯一の主であるイエス・キリストを否定しているからです。（ユダの手紙３章４節）

「神の慈悲を怠惰に変える」には、人が不注意な生活を送るよう「奨励」する為に、神の善意、偉大さ、お赦しが、際限の無いものであるという、嘘偽りを広めなければなりません。それは、何をしても自分は赦されるだろうと信じ、神の偉大さ、善意、慈悲に常に頼りきった罪深い生き方です。

この狡猾な教えは、聖書が完成する以前から既に始まっていました。

ティアティラ、コリント、ローマ等の都市では、偽の教師達が新たに改宗した異教徒の間に紛れ込み、彼らの複数の神を崇めた神殿で霊的な「儀式」としての性的な行為を含む、昔ながらの習慣に戻るよう彼らに勧め、こうした行為は全く罪ではなく、神はそれを祝福されるだろうと教えたのです！

イゼベルという名の売春婦は、ティアティラの神の真の協会の信徒に「宗教的儀式」と称して彼女と淫行を犯すようを教えました。

イゼベルは美しく官能的だったそうなので、その教会内に、これを進んで信じた者達がいくらでもいた事に疑いの余地はありません。

現在、こうした行為を嫌悪する一方で、神の完全なる十戒に背いた生活を、他のもっと些細な行動を通じて送り、それでも、自分が「キリスト教徒」であると自負している非常に多くの「キリスト教の人々」がいます。

何百万という名ばかりのキリスト教徒は「正しい生活」を送るべきだという信念を持っています。しかし、その「正しい生活」を形作る指針は大抵、社会の特定の一部でしかない教会や団体、集落や社交界、そして、核家族や親戚によるものです。

殆どの人は、神に従う為の必要事項に気づかないまま満足した生活を送り、自分の周囲の社会や宗教的な生活要素に束縛される事を自ら受け入れています。

こうした人々にとって「罪深い生活」とは、おそらく不適切な映画を多く見たり、歓楽街へ行き、飲酒や博打をして馬鹿騒ぎをしたり、大いに「悪口」を言う等様々な「世間」の風習や快楽にふける事でしょう。

多くの人々が自分達の頭の中に、自分なりの「キリスト教徒」としての生き方を抱えており、そうした社会の生活要素に束縛された生活を送っています。彼等は自分達がキリストの「慈悲」の下にいるのだから、特定の律法に実際に従う必要はないと思っています！

いわゆる「生まれ変わり（信仰の更新）」を経験した名ばかりのキリスト教徒は、その殆どが「神の為に生きる」と口にします。それは、邪悪な人生ではなく善良な人生を送るという意味です。彼らにとってそれは、悪よりも善の考えを抱き、不正直であるより正直であり、社会で胸を張れるよう努力し、友人や地元の人々全員から「善良だ」と思われる事です。

多くの人にとって、慈悲とは「神の為に生きるキリスト教徒という在り方」となっています。

こうして慈悲は、神の御心の資質の一つというより「個人の在り方」を示すものだと、多くの人の意識の中で僅かずつ置き換えられていったのです。

聖書に明示されている慈悲という言葉の本当の意味を理解する代わりに、多くの人々は慈悲とはキリスト教徒が「救われた状態」にあるという、漠然とした聖書の表現だと思うようになりました。つまり、神はそういった者を微笑と共に召し出され、「慈悲の加護」を与え、キリスト教徒とされたと言うのです！

それは真実ではありません！

慈悲とは、人が罪を悔い改めた時にのみ、イエス・キリストが惜しみなく与えて下さる、不相応な赦しなのです！

悔い改めるとはどういう事でしょう？

使途ペトロは、ペンテコストの日にエルサレムで数千の人々を前にこう言いました。「悔い改めなさい。罪を取り払う為に洗礼を受ければ、あなた方は聖霊を授かるでしょう！」（使途言行録２章３８節）

後にペトロは言いました。「だから、悔い改めて改心しなさい！」（使途言行録３章１９節）

イエスは人々に悔い改めるよう命じる事で、ご自身の聖務を始められました。

「その時からイエスは『悔い改めよ、神の王国は近い！』と説き始めました。」（マタイによる福音書４章１７節）

どの辞書にも、悔い改めるとは、深く反省し、心を痛め、違反と罪に自らを恥じる事、と書かれています。それは、悔恨という、人が間違い（罪、過ち、失敗、悪行）を犯した事を深く反省する心の在り方だけでなく、今後これ以上罪を犯さず、「より良く生きるという決意」を含んだ悔恨であり、より崇高で正しい生き方を受け入れる事なのです。

使途ペトロが「改心しなさい」と言った時、彼は「変わりなさい」という意味を込めたのでした！聖書が示すこの変化とは漠然とした曖昧なものではなく、神があなた個人の人生全面において求められている、とても明確な変化なのです！

イエスは言われました。「あなた方が悔い改めなければ、皆等しく滅びるだろう！」

人が悔い改め、神に罪の赦しを求める時、それは同時に、これからは神の律法に「従う」意思があると言っているも同然なのです。悔恨とは犯した罪を深く後悔する事なのですから！

罪とは神の律法に背く事です。 罪を悔い改める事は神の律法に背いた事を反省する事です。 もし反省するならば、神の律法にこれ以上背かないという事になります！ 次の例を通して説明しましょう。 皆さんは様々な法律で規制されている社会に住んでいます。連邦、州、郡、地域法によって事実上あらゆる行動が規制されています。それが連邦法や民法、単なる道路交通法であろうと、同じ原則が適用されます。

自由と市民権を維持する為には、国の法律に従う事は必須です。破った法によっては、罰金か些細な罰もしくは警告を受けるだけで、自由なままでいられるでしょう。

もっと深刻な違反もあります。 重窃盗、窃盗、放火、強盗、住居不法侵入、自動車窃盗、殺人の場合は（最近のひどく甘い判決にもかかわらず）刑務所に入る事になるでしょう。

あなたが丁度次の様な事をしたと仮定しましょう。

感情的になり、悪い仲間に 唆 されて明らかに違法の何らかの行為を犯します。逮捕され、やがて裁判にかけられたとしましょう。しかし、裁判官があなたが到底支払えないような高額の罰金（例えば百万ドル）を科した時、全く見ず知らずの人があなたの擁護に立ち上がってこう言います。「裁判官、私はこの人が真剣に深く後悔していると思います。私は彼が一時の感情に流されて悪い仲間の影響を受けてしまったのだと思います。彼は誠実な人で、自分の生き方を改めてより良い生活を送る事を本当に願っていると思います。」

「ですから、彼が自由になれるよう、私が彼の罰金を支払います！彼がこの罰金を支払う必要はありません！」

この様な事は私達の社会ではまず起こらないでしょうが、要点は掴んでいます。（父なる神の原型としての）裁判官が（イエス・キリストとイエスが私達の罪の為に犠牲となられた事の原型としての）擁護者に言います。「それで良いでしょう！ あなたが裁判所に百万ドルを支払えば、我々は裁判歴に被告人は放免となったと記録しましょう。」

そして裁判官は、逮捕され、裁判にかけられ、刑を宣告されたあなたを見て言います。「あなたは放免となりました。しかし、もう二度とこの様な状況に陥ってはいけません！」

お分かりでしょうか？

皆さんは自由な国の国民として法律に従う義務があるのです。それを破ったらどうなるか！言わずとも分かるでしょう。

神の聖なる律法の場合、律法を知っているかどうかに関わらず（律法の無知は言い訳になりません）、キリスト教徒かどうか、キリスト教徒だと公言しているかどうか等に関わらず、神の十戒に従う事が義務付けられています。

何百万という多くの人々が日々気軽に十戒に背いていますが、彼らは気付く事無く律法の罰である死に歩み寄っているのです。（ローマの信徒への手紙６章２３節）

あなたが悔い改める時、神の律法に背いた事を深く反省している、とあなたは神に言います。

ナザレのイエス・キリストは被告弁護人として、あなたの悔恨の告白を信じ、あなたの罪の為に自らを犠牲とする事を望む、と正義の裁判官である神に言われます。

そして不貞行為を行った女性にイエスが言われた様に、神は同じ事をあなたに言われます。「私もあなたを咎めない。行きなさい。もう罪を犯してはなりません！」

真の悔い改めとは、神の十戒に背いた事を深く反省し、神の聖霊の力と、あなたの日々の大祭司かつ仲裁者であるイエス・キリストの助けによって、今後は十戒に背かない事を決意する事です。

ダビデは深い悔恨の気持ちを経験し、次の様に言いました。「神よ、あなたの愛情をもってどうか私にお慈悲を、あなたの奥深き憐れみによって私の咎を拭い去って下さい。

「私の不義を完全に洗い去り、私を罪からお清め下さい。」（詩編５１章１－２節）

ダビデが神の慈悲と赦しを懇願した時、彼は自身の罪が赦されて忘れ去られ、二度と言及されぬよう、罪の罰から清められる事も願いました。

この場合、ダビデは神の慈悲と情けを求めたのです。

後に彼は言いました。「私はあなたの律法をどれほど愛していることでしょう。一日中深く想っています」（詩編１１９章９７節）

「罪とは律法に背く事」（ヨハネの手紙I、３章４節）だという事と、罪を犯した事を本当に悔い改めるという事は、神の律法に背いた事を悔い改める事だという事を決して忘れないで下さい。

パウロが言った様に、「従って、あなた方の命に限りある体を、罪に支配させてはいけません。欲望に従ってはなりません。あなた方の五体を不義の為の道具として罪に捧げてはいけません。そうではなく、その身を神に捧げなさい...罪があなた方を支配する事はないのですから。あなた方は律法ではなく慈悲の下にいるのですから。」（ローマの信徒への手紙６章１２－１４節）

お分かりでしょうか？罪を犯した事を反省し真に悔い改めた人とは、神の律法すなわち神の十戒に背いた事を反省する人であり、神の助けによって十戒を今後二度と破らないと決心した人の事です！悔い改めた人は理解しています。罪や肉体の欲求、そして悪魔サタンの策略やその影響、さらに、自身を取り巻くこの世の悪い影響が自らを「支配」する事はもはや無い事を。それらによってこれ以上罪深き人生を強いられる事が無い事を！自らが（律法の罰の下にいるという意味で）「律法の管理下に在る」のではなく、その身に余る神の慈悲と赦しの下に在るという事を！

パウロは、慈悲という言葉の本当の意味を知らない人の心に浮かぶであろう質問に答え続けます。

彼は言います。「それでは、どうなのでしょう？私達は律法の下ではなく慈悲の下に在るのだから、（十戒を破るという）罪を犯しても良いのでしょうか？ とんでもありません！」（ローマの信徒への手紙６章１５節）

もうお分かりでしょうか？聖書の「律法の下に在る」と言う記述は、文脈から判断して、律法の「罰」の下に在るという意味なのです！

律法に従う事は「律法の内に」いる事ですが、罪を犯す事は「律法の管理下に入る」という事です。しかし、先の裁判の場面の例えを用いる事で、私達が理解出来る単純な違いがあります。

我々自由な国民は、「建国の父達がもたらして下さった自由の下力強く在る」事が出来ますが、その為には「法に従順な国民」であり続けなければなりません！

それのどこがいけないのでしょう？どれ程のアメリカ人や（イギリス、カナダ、オーストラリアといった）他の自由主義国に住む人達が、彼らが従わなくてはならない法律について、毎日文句を言っていますか？これは時として不当に思える税金や民法の事ではなく、十戒とたいして違わない重要な法律の事です。殺人、強姦、強盗、窃盗、略奪、または、隣人の所有物への放火や破壊をする事は違法であり、そうあるべきです！

いったい何人の「法に従順な国民」が、これらの制約に対して日々不満を感じ、心中反論しているでしょうか？こんな馬鹿げた問いの答えなど聞くまでもありません！

これを国に当てはめた場合、「法に従順な国民」である事が悪いわけなどありません。皆さんが私と考えを同じくしているのなら、実質的に神聖とみなされる独立宣言や、修正条項を含む憲法という文書によって与えられたあなたの自由を、大いに尊重されることでしょう。

神の律法においても全く違いはありません。なぜキリスト教徒は、神の律法に従うよう制約される事を、身を削る様な重荷に似た、ひどい負担を抱えているかの様に感じるのでしょう？

これは、米国の様な自由な国の国民が、隣人の家に押し入ったり、その車を盗んだり、その妻を犯したり、また、彼を殺したりする事を禁ずる厄介な枷の束縛について、文句を言うだけで他に何もしていないのと同じ事なのです。

神の律法の何が悪いのでしょうか？

神の十戒に何か本当に間違っている所をあなたは見つけられますか？あなたが十戒を読んでからどれほどの時が経ちましたか？記憶を新たにする為に次の様にしてみて下さい。ご自身の聖書の出エジプト記２０章を開き、ゆっくり全章を読んで下さい。

十戒だけではなく、前後の文も読んで下さい。神が（旧約聖書の仲裁者である）モーゼとイスラエルの民の為に創られた最も偉大な律法を、その素晴らしいお声で 雷 の様に響き渡せた、震撼する山について読んで下さい。

十戒をゆっくり読みながら、「これらの律法の何が悪いのか？」と自らに問い続けて下さい。

十戒が国単位で守られた場合の実用性を考慮してみて下さい！例えば、米国が十戒のどれか一つに完全に従ったならどうなるでしょう？

殺人に対する戒律はどうでしょう？　この一つの戒律が守られたとしたら、膨大な量の犯罪が米国から消滅するだろうと言う事は、簡単に想像がつきます。

イエスは山での説教において、憎しみ、激しい怒り、殺意は殺人と同様である、とされました。ですから、「理由なく兄弟に怒り」、「くたばれ」や「この役立たず」などと言う人は、すでにこの戒律の精神と意図に背いているのです。

律法の精神と意図に背くという事は死という罰を受ける事です！このため、イエス・キリストは律法を強化し、それを新約聖書で「尊ぶべき」ものとし、かつてない程の拘束力のあるものとされました！

従って隣人が不当に兄弟に怒る事は、すでに神の十戒に背いている事になるのです！そして十戒のどれか一つに背く事は、その全てを犯すのと同罪なのです！

罪とは「律法に背く事」（あるいは十戒に背く事）という事を思い出して下さい。

十戒を守った時の利点について考えてみて下さい。先の十戒が文字通りの意味と同様にその精神も完全に守られたならば、米国は事実上の理想郷になるでしょう！

殺人に関する律法を完全に守るという事は、憎しみの根絶であるという事を思い出して下さい。憎しみとは、恐れ、自我、虚栄心、嫉妬と密接に関係した感情です。

全ての国民が憎しみを持たないように、自らの心と感情を管理できる様な国は、次の様な画期的で素晴らしい恩恵を受けるでしょう。

１．国中から一切犯罪がなくなるでしょう。虚栄心、嫉妬、恐れ、欲、憎しみから無縁の人々は、善と愛に満ちた正直な人々であることでしょう。

２．一切の人種差別が無くなるでしょう。偏見は憎しみを生み、憎しみは偏見を生みます。憎しみを根絶し、（憎しみとは対極の）他者を思う気持ちである愛が憎しみに取って代わる事で、その国は人種差別の最後の痕跡をも消し去るでしょう。それは、経済、政府、教育、宗教など、あらゆる社会構造において、平等な機械が与えられる事を意味します。

それは結果として数十億ドルという福祉費用の節約をもたらすでしょう。公民権をめぐる争いが始まって以来、米国が度々直面してきた暴動、火事、略奪が無くなる事で数億ドルの節約となり、ユダヤ防衛連盟、黒豹党員、過激派学生、ジョンバーチ協会、クー・クラックス・クラン（KKK）等の多くの組織の活動が終わるでしょう。人々が十戒のたった一つを守るだけで、人種差別が無くなり、平和、愛、善意、繁栄の風が国中を吹き抜けていくでしょう。

３．娯楽全般が見直されなければならないでしょう。憎しみが無くなれば暴力もなく、平和のみが存在するので、本、新聞、小説、雑誌、映画、テレビが大きな影響を受けるでしょう。暴力がなければ、テレビはより為になる、教育的で明るいものになり、希望に満ち、幸福で楽しく活気あふれる番組を提供し、それは娯楽産業全般に革命をもたらすでしょう。

４．宗教も激変する事になるでしょう。様々な宗教団体同士の無益な争いや、侮辱、疑念、恐れ、罵倒、嫉妬、怒り、憎しみが存在しない為、全ての宗教が大きく変わるでしょう！

分かって頂けたでしょうか？あなた方が、このたった「一つの戒律を守る」という事を、今の社会で実用化する為の様々な方法を考え、それによって社会がどう改善されるのかを考えてみて下さい。

強欲を含む他の戒律にも同じ教訓を当てはめる事ができます。そうした場合、物質主義や虚栄心、自己中心的で強欲な富の追求、不当利得、そして「形ある物」にひれ伏す態度を一掃することでしょう。私達の社会では「人を愛する為に物を利用する」べきなのに、「人を利用して物を愛する」傾向にあります。

同じ事が十戒のどれについても言えます。

しかし、待って下さい！

金曜日の日没から土曜日の日没までの、聖なる７日目の安息日を守らなければならないと明記した戒律は、また別の問題です！

神が十戒をどうにかして「修正」され、第四の戒律を削除して九戒とされていたならば、律法と慈悲に関する疑問や、神の十戒を消し去ろうとするあらゆる神学上の議論はそもそも起こらなかったでしょう！

平たく言ってしまえば、神の御前において霊的で正しい目的の為に聖別された、神の特別な聖なる日としてその日を「守る」、という義務に反対する要求こそが、多くの人々を苛ませているのです。

自ら考案した宗教的な習慣とその探求として、特定の日を「選ぶ」事は良い事と言えるでしょう。一方、神の介入無しに、「自分達だけ」で七日の内の一つを保守すべきだと「決めつけ」てしまう程の正当性は、人々に多大な自己満足感と、神の御前で正しく在れるという感覚を与えます。

そういった人々の理屈はこうです。

「別にその日を維持する事自体を『気にして』いるわけではありません。実際、全然気になりません。ただ、私は神を愛しているが故にその日を維持したいのです。神に『そう言われた』からではなく、神を愛し仕える事が私の望みだからです！」

他にも色々な形で表現されているでしょうが、これこそが理解しておくべき根本的な態度なのです！

多くの人々が「神の言葉」に「命令」される事を嫌い、十戒が「十の提案」へと書き換えられるのを望んでいる様に見えます！

もし、神が「強く勧める」基本的な指針としての提案しか存在しなかったらな、より多くの人が、たまにはその幾つかを無計画でいい加減であっても、守ろうとするでしょう。

でも戒律ですって？ 命令ですって？ 神が何かをするよう「あなたに命じる」ですって？ こうなると話は全然違います！

これが全ての問題の要なのです！

神は言われています。「なぜなら、肉欲に満ちた心は神の律法に従わないからです。いえ、従いえないのです！」（ローマの信徒への手紙８章７節）

神は私達が本質的に神の律法に反抗的で反感を抱く事を示しておられます。しかし、使途パウロが次の様に言っている通り、十戒に問題はありません。「こういうわけで、律法は聖なるものであり、戒律も聖なるものであり、正しく善いものなのです」（ローマの信徒への手紙７章１２節）

彼はこうも言っています。「私達が知るとおり律法は霊的なものであるが、私は俗世の者が故に罪深き定めに在る。」

「私は私の望んでいない事はやってしまい、望んでいる事はやらないでいる。自分では嫌っている事でさえ、私はやってしまっている。ならば、私は私の望まぬ事を行う事で、律法が良いものであると認めている事にもなる。」（ローマの信徒への手紙７章１４－１６節の意訳）

十戒には何も「問題」は有りませんが、十戒が指摘している様に「人間」には多大な問題が有ります。それが返って多くの人々に罪悪感を与え、不愉快に感じさせます。なので、多くの人々は、律法とちゃんと向き合い、自らの過ちを悔い改める代わりに、神の十戒という（彼らの個人的な罪と過ちを晒け出す）鏡に背を向け、身勝手で独善的な道を歩み、悔い改める事を拒否するのです！

皆さんはどうですか？ 神の律法に従うべきだと思われますか？

おそらく皆さんは、次に挙げる聖書の言葉を参考に、自分なりの決断を下す必要があるでしょう。

「…もし生に受け入れられたいのなら、戒律を守りなさい」（マタイによる福音書１９章１７節）

「心の底から神の律法に歓喜しています」（ローマの信徒への手紙７章２２節）

「我等が主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。この様に、全霊を持って神の法に仕えていますが、この体は罪の法に仕えているのです」（ローマの信徒への手紙７章２５節）

「もしあなたが『隣人を自分の様に愛しなさい』という『崇高な法』に従うのなら、あなたは良くやっています。しかし、贔屓を行った場合は、あなたは罪を犯した事になり、律法によって違反者と断定されます。全ての律法を守った者でも、たった一つでも犯してしまえば、その全てを破ったのと同罪なのです。（ヤコブの手紙２章８－１０節）

「私達は神の戒律を守る事によって、私達が神を理解していると分かります。神を理解していると言いながら、神の戒律を守らない者は嘘つきであり、その者の内に真実はありません。」（ヨハネの手紙１２章３－４節）

最後に、キリスト再来の直前の、最悪の迫害の時における、神の真の教会の最後の生き残りについての記述に注目して下さい。

「竜は女『神の教会』に対して激しく怒り、その子孫の残りの者達、つまり、神の掟を守り、イエス・キリストの証を受け継ぐ者達と戦う為に出て行った。」（ヨハネの黙示録１２章１７節）

神の律法に従う事は慈悲と矛盾するという間違った考えをしないで下さい！あなたが死罪を免れ、その自由と喜びに浸っていられるのは、あなたが慈悲の加護を受けているからであり、それは、あなたが（神の律法を破った事を悔い改めた時のみ）赦された事を意味するのです！

ナザレのイエス・キリストは、身を引き裂く様な恐ろしい鞭打ちにその背を差し出し、あなたの罪の為に御自身の命の血を流してもいいかと、父なる神に自ら進んで尋ねました。

彼は縛られ、唾を吐かれ、死の寸前までひどく打たれながらも、十字架を背負い、その重さによろめき倒れるまで嘲る群衆の間を進み、あなたのと私の罪の為に両手と両足に釘を打ち込まれて、高く掲げられて亡くなったのです！

彼は私達が神の律法に背いた為に亡くなられたのです！

私達に代わって彼が亡くなられたという事実を受け入れた時、イエスの命を奪ったその律法に背いても良いと口論する事は、「イエス・キリストの慈悲」を不埒なものに貶めるという歴史上最も恥ずべき行為です。

ですが、私達が悔い改め、キリストの流された血を受け入れるならば、彼は私達に先の女に言われた様に言うでしょう。「行きなさい。そして、もう罪を犯してはならない」と。「行きなさい。そして、もう二度と（心中でも）これらの十戒を破る事なかれ！」と！

しかし、これで終わりではありません！

完全に悔い改めた者の良き心にも、試練と誘惑はやって来ます。 ですから、ナザレのイエス・キリストは亡くなったままではおられなかったのです！

彼は私達の生ける救世主であり、私達の為に日々仲裁をして下さっています。私達がキリストの「慈悲」の下に在っても、罪を犯す度に、私達には彼の日々の仲裁が必要なのです。

「自分に罪は無い（十戒に背いた事は無い）と言うならば、自分自身を欺いている事になり、真実は私達の内にありません。

「自分の罪を（他の誰でもなく神に）告白するならば、神は信念と正義の御方なので、私達の罪を赦し、全ての不正から私達を清めて下さいます。」（ヨハネの手紙Ⅰ、１章８－９節）

あなたは、その慈悲の下に置いて下さる神を褒め称えるべきです。それは、あなたが神の律法を破った事を誠意を持って悔い改める事で、神があなたを赦し、その罪をお忘れになって下さると言う事なのですから！

「キリスト教徒は完璧ではなく、赦されただけです！」と書いてあるバンパーステッカーがあります。それは真実です。しかし、悔い改めて赦されるという事は、過去の全ての罪が取り除かれるという意味である事を覚えておいて下さい。

今日も明日も来年も、あなたの残りの人生は続きます。では、もしあなたが失敗したらどうなるのでしょうか？　もしあなたが挫けたらどうなるのでしょうか？

たとえ人々がキリスト教徒としての人生を歩もうと試みた後でも、彼等は失敗、挫折し、この俗世の理に逆戻りしてしまったので、絶望的に見放されてしまった、とサタンは人々に信じさせたがっています。

多くのこうした人々は赦されたいと願っています。彼等は罪から清められる事を望み、永遠の命という救いを欲しています！しかし彼らは、もう手遅れだという悪魔の嘘を信じてしまっています！

そんな事はありません！イエス・キリストは今日も「生きて」おられます。イエス・キリストは人々の誘惑や弱さをご存知の慈悲深い大祭司です。彼は私達の様にあらゆる意味で誘惑を受けましたが、そういった肉体に宿る罪を克服されました。だからこそ彼は父なる神に懇願出来るのです。「父よ。私には理解出来ます。どうかこの者をお赦し下さい！」と。

あなたがまだ救済を求めるならば、父なる神はあなたにそれを与えて下さる用意が出来ています。神は誰も滅ぶ事を望んではおられません。神はあなたを赦す事を望んでおられます！

あなたが赦されても、イエス・キリストの助けが毎日必要です！慈悲とは神の愛に満ちた赦しであり、罪深い人生を送る許可ではありません！

ですから神の律法に背いた事を悔い改め、従う事で国々さえ救いうる素晴らしい律法について考え、それを守りあなたの日常の一部とする為に、神の助けをお仰ぎ下さい！

— 終 —

この資料は、内容を改ざんせず、著者と出版社を明確にした上でなら、コピーして友人や家族に無料で配布する事が出来ます。一般大衆向けに出版する事は出来ません。

この出版物は個人的な探求の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の言葉をそのまま受け入れるのは賢明ではないという事を理解し、全ての事柄に関して、あなたはご自分で聖書に基づいて証を立てるようにして下さい。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱　７４７Flint、テキサス　７５７６２

電話番号：（９０３）５６１-７０７０　　Fax:（９０３）５６１-４１４１

当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

www.garnertedarmstrong.org/

ガーナーテッドアームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く、協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。